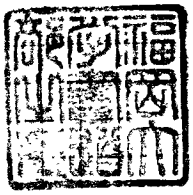
蜘京林島

15号 福岡大学 書道部



巻頭言

青年は教えられるより、刺激されることを欲する　ゲーテ

青春は人生にたった一度しかない　ロングフェロー

青春の辞書には失敗ということばはない　ブルバー・リットン

青春というものは奇妙なものだ。外部は赤く輝いているが、内部ではなにも感じられない　サルトル

青年は未来があるというだけでも幸福である　ゴーゴリー

青春はとかく己に謀反したがるもの、そばに誘惑するひとがいなくとも　シェークスピア

青春はなにもかもが実験である　スチーブンソン

目次

巻頭言　1

目次　3〜2

現次点において　商四　山口達也　4

書　商二　田中博美　5

一思考　法三　押越和則　6

「僕の独り言」　経三　山本登　6

竹の子とり物語『今は昔』　経四　渕田精二　7

大学生　経二　大庭敏夫　8

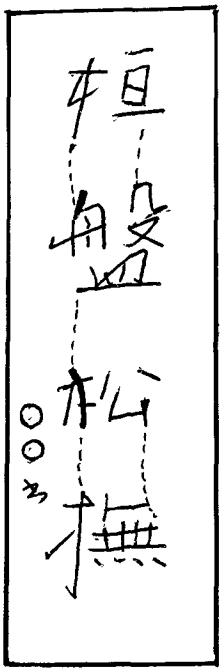
「死について」　経一　野端富継　9
空言　法二　萩本洋子　10
私の一日の生活　11
福岡大学書道部規約　13
役員名簿　16
編集後記　17

現時点において

商学部　四年　　山口達也

僕が今、やっている事、考えている事、また、今一番頭をいためている事などを書いてみようと思います。今僕は六朝の造像を勉強しています。この骨格のがっちりした、力強い、安定感のある、また形のおもしろさは勉強していて飽がきません。偏旁の大きさ、上部下部の大小、これはあらゆる作品に共通することではないかと思います。いわゆる楷書は、ほんとうに一画一画を考えて書くという所に大変勉強になります。この前の九州書道協会展で、我々書道部の赤木先生の作品を見ていて次のことに気が付きました。

驪の字は、偏を大きく旁を小さくしてあり、旁は偏より上部に書いてある。これで全体をつっている。龍の字、今度は逆に、旁を下部に置き下に行く運動感をつくってある。そして最後の三つの画は軽く書かれていて、驪龍をやわらげてある。そしてまた、下に行く運動感を作るために玩の字は小さく書き、また上の二字を安定させてある。それから珠の字の偏王の字は全体の偏、すなわち馬音王を安定させ、牛は上部の旁麗𠙵元を安定させてある。大事なのは最後の画、つまり朱の人左払い、右払いは、この作品のちょうど中心に位置させて、全体を安定させてある。この朱は、極めて強い線で書かれてある。この先生の作品を基にして学内発表週間には次の作品を作ってみました。桓の字、偏に対し旁を



極端に上の方にやって全体を思いっきりつってみました。そして木の方向に逆らわずして、盤の字の第一、二画目をそれと同じ方向に流してやり、第四画目を内側に入れてやりました。殳をつって上から急速に落ちる感じを与え、皿で上の字を安定させました。盤の第四画目の運動に逆らわずして、松の字を同方向にもってゆき、運動感を作るため小さく書き、また上部の緊張感をやわらげました。そしてハッと目を覚まさせるごとく、撫の字の偏を思いきって長くし広い空間をとってゆったり書きました。旁の無の字の𠂢を上部に書き、上の字全体をこれでうけて安定させ、灬を軽く書いて全体を落ちつかせました。出品した作品は、少し違ったものが出来ましたが

今述べたことを頭に入れて揮毫しました。実は詩文を見違えて逆に書きました。大変申し訳なく思います。㊤撫松盤桓　楷書作品はほんとに難しいですが、それ以上に書いていておもしろいものです。次に作品を作る場合重要な事は、正反対の字を書くということです。つまり、強弱、遅速、重軽、遠近、という具合いに。そうすることによって両方とも生きるわけです。今一番考えている事は、前にもいった、一画一画を考えて書くということはもちろん、それ以上に紙面にどれだけの大きさで、また、どれだけの墨量で書いたらよいのか。これが今一番頭をいためていることです。やはり何といっても書くこと以外には何もないようですね。どんどん頑張りましょう。

書

商学部　二年　田中博美

これから私が書抜について少々述べたいと思います。だから参考程度にしていただければさいわいです。

書体には、骨や甲、そして金属に彫った古文、さらに進んで隷書楷書、行書、そしてより速く筆記するために出来た草書があります。以上のように色々ありますがその中でも一番なじみやすい楷書について、その中の九成宮醴泉銘（属に九成宮とよばれている。）について少々述べたいと思います。

大まかにいうとこの書の特長は、謹厳な感じで一字ずつよくまとまり均斉構成になっていてこのような書風は全体として並列構成にするほかはないのではなかろうか。そして私もであるが、特に初心者は形にとらわれやすい。そして、その結果筆脈が切れたり、筆勢が鈍ったりしやすい、だからその点に注意が必要である。だから書く前に、その法帖の雰囲気や気付いた点等を考慮に入れて、自分の思ったままに素直に紙に表現することが大事ではなかろうか。

それに九成宮の字のまとまりはどこから来るのか、とか字の広がり、線の伸びはどうしたら出るか等を考えると見る目もつくし、これから自分が創作をやろうという時に非常に役立つのではないでしょうか。

造象記張猛龍について一言述べさせていただきます。ある本に、こういうことが書かれていました。龍門造像の初期のものの結構法が完備して字形の上ではスキがなくなり、それでいて決して窮屈ではない。用筆法は縦畫、横畫の力勁さ、転折のきびしさ、これらは龍門造像の書法の流れを思わしめる。（造像記は、斜めに打ち込む起筆一つ踊らせて折りまげる肩のところの筆使いなど、やはり装飾的要素を多分に持つ「大字」としての意識から来たものと考えられないだろうか。つまり言葉を読ませるというだけでなく、文字「造形」として見せるという意識が働らいているのであろう。）散水點の変化、波法の緊密さに至っては精妙というに憚らない。このような精妙な楷法が出来上がったのは、一面上北魏の文化的向上と南方文化

との融合等が条件とされている。

こういうことを知っておくと臨書にも少しは役立つのではないでしょうか。そしてさらにこまかいところに気をつけて自分なりに解釈していくと、自分なりに納得の行くのが出来るのではないでしょうか。ただし自己満足にならないように先生の指示をあおいだら、よりいっそうの進歩が望めるのではないでしょうか。

一　思　考

法学部　三年　押　越　和　峰

……という結論は、矛盾という事である。二十年間この世に生きているけど思う。自分は今、不安でならない。世の中に生きている人を見ると何も苦しみ、悩みはない様に生きている。何の為に生きているのか不思議でならない。（自分がまだ、不安で自信がないのでこう思うのかも知れないが……）

世の中の人々の心の貯水池は渇ききっている。枯れているならまだいい、枯れすぎているのだ。ギマンという仮面をかぶって歩いている、そういう人間を見ていると撲り倒したくなる。又、問いかけてみたくなる、「君は今、生きているのか？何の為に生きているのか？」と。

自分は人間を見る時、見方の一つとして、「生きているかどうか」という面から見る事がよくある。人間は死んでいる時以外は、生きているしかないのだ。しかもそれは、瞬間的なものなんだ。死ぬことが怖い人間は、生きる資格はない。生きるということは、ある面で涙があふれてとまらない状態を経験する事である様に思う。今の世の中の人々は、その感動を忘れているとしか思えない。しかし、その人々はそういう感激のあった事を完全に忘れているわけではない、知っている、心の奥の中で、それが、社会の規格の中で、組織の中で飼い馴らされて、いつの間にか、反対にその事を嘲笑する立場になっているのだ。

人間は、皆、自分がかわいい、かわいいからかわいがっていたら何もならない、かわいいならいじめなくてはいけない、少なくとも自分が、世の中で生きて、涙を血を流そうと思うなら。

「僕の独り言」

経済学部　三年　山　本　登

「本日は、晴天なり。」と大声で言いたいような気分であるが、生憎、本日は、どんよりと曇っており、おまけに蒸し暑いために、先程寝床から起きたばかりの僕の頭の中には、何も存在する事さえなく、たたけば安いスイカの音がするために、「本日は非常に不愉快なり。」こんな悪条件のもとで、数時間後に迫った原稿の〆切に何を書いたらよいのか四苦八苦している現在、突入している青春期に、自分が経験してきた事、又それについての私感を述べてみよう。

何才から何才までが青春期だというはっきりした尺度が、あるとは思わない。今まで親あるいは、友人等に何かと頼り、救われていた時点から、自己の意識がめざめた時点へと転換した時こそ青春への突入だと思う。自分について考える、愛について、死の世界について、その他色々な事について考える時期もこの時期ではないだろうか。そして、こうした問に答えらしきものを出すが、正解は得られない。そして又、問いかけては考える。そうした時期が青春ではないだろうか。恋愛は、正しく青春時代の大切なものである。恋愛には色々な型がある。相愛、片思い、そして、失恋。僕は後者二つを、経験済みである。その当時は、何もかもが、その事に結びつき考え悩み苦しんだように思われる。そして、失恋した時なんぞは、不幸のどん底に突き落されたように感じたものだ。そんな時に、友人や経験者たちは、「それこそ青春期に最も大切なものである。」とよく言ったものだ。当時の自分には、そんな言葉が、嘘のように思われ、単なる慰めにしか思われなかった。そんな苦道を抜け出た現在では、「やはりあれが青春時代に大切なものだったのかな。」と少なからずも思うのである。もし、今そういう経験をされている方が居れば、僕も経験者として、貴方にそう言うだろうし、言わざるを得ない。

友情も青春時代に最も大切なものである。「自我」を知り、自分の道を求めるのも、自分一人では出来ない。そこには、師や友人の助けが必要である。青春時代において、共に学び、共に遊ぶものとして友人の影響は大きなものである。友情とは、やはり自分と同等の立場に置かれ、共に考え悩み、共に求め合う、心と心の触れ合いではなかろうか。こんな中での友情こそ青春時代には、大切なものだと思う。

以上、何だか訳のわからぬ事を述べたが、これで、どうやら原稿の〆切にも間に合いそうで、少しは気が楽になり、僕の独り言もこれで、終わりそうだ。

しかし、まだ僕の頭の中は何も存在する事さえなく、たたけば安いスイカの音がする。

竹の子とり物語『今は昔』

経済学部　四年　渕　田　精　二

私が小学校時代から憧れていた大学生活もあと半年を残すだけとなったが、今、時として昔が非常に懐かしく思われる。二十二年間の大半を山の中で過ごした私は、タケノコの季節になったり、ツクシが顔を出す頃となると友達とよくとりに行ったものだ。（もちろん生活は、かかっていなかったがー）。又、家の近くには三大急流の一つ〃球磨川〃があった。夏ともなれば、良く時間を忘れて、一日中泳ぎまわり、小さな魚を追いまわしたりしたものである。（仏文学者内藤濯氏は〃球磨川〃について、「国鉄肥薩線の八代駅から人吉行に乗ると、日本三大急流の一つである球磨川の右岸

沿いに走っている汽車がいつともなく左岸に移ったと見るもなくさらに右岸の風趣を車窓の外にする楽しさといったら、まったくこの世の稀である」。としている）。

そんな私が、始めて筆に触れたのも確かこの頃の様に思える。日曜日になると小学校三年である兄は、よく「習字箱」を自転車の後にしっかりと結びつけ、五〇〇米離れた学校に習いに行っていたので、私も又、習字をやるのが、当然のごとく始めたのであるが、まだ自転車に乗ることのできぬ私は、兄のお古のだぶだぶのズボンを、ぞろびかし習字箱の硯と文鎮をガタガタいわせながら、泣きそうな顔で、自転車の後を走ってついて行ったことを想い出す。そのかいあってか、私は、三年間でみごと「二段」。実は、当時二段だと自負していた私であったが先生が手をとって書いた作品を、添削してもらうのであったから、全く自慢にもならない。席書会なぞ、ある訳もないから年に一度行なわれる村の〝産業祭〟を目標に数々（?）の賞状を手にした。確か今でも、田舎のタンスのどこかにまぎれこんでるはずであるが　　。

こんなのんびりとした環境で育った私にも、一つの大きな変身の時が来た。即ち、福岡に於ける大学生活である。始め田舎から出て来た私は、人と話すことさえせず、下宿で一人本を読むことが多かったものであるが、私は、二つのことをやることにした。その一つが、書道部への〝入部〟であった。ここに於いて私も、多くの友を持つことになる。が、これからは、徒然草『つれずれなるままに』となり、このテーマに反する。私は、福岡大学に於いて書道部に於いて何を考え、学んだのであろうか。もし次回の〝荒鷲〟に、書く機会が与えてもらえますなら幸いであります。

おわり

大学生

経済学部　二年　大庭敏夫

私の友人が今年、特待生に選ばれました。成績を聞いてみると全部優だったそうです。今、私は書道部員です。二年生です。そして10月には役員改選があります。今私は、『荒鷲』の原稿を書いています。下宿の友人が後でギターを弾いています。下宿の先輩が後でコーラを飲んで寝ています。今十時十五分です。今月分の残りは、あと三〇〇円。明日はバイトに行きます。土方なんです。私のいる下宿には、末広さんと本村さんが下宿しています。同じ下宿なんです。明日は授業があります。しかしさぼります。今は夏休み前。授業へ出席しても学生の姿は、ところどころに影をみる程度です。勉強はしていません。やる気はあります。最近、思考力が衰えています。勉強しないためです。大学は自由なところです。とっても居心地がいいです。このままで四年間を過してしまうと、どういうことになりますでしょうか。大学は怖いところです。自由なところなんです。自由という恐ろしさの中に今、自分は、うもれています。

私は書道部員です。大学へはいって、初めて書道を始めました。夏休みには、二回目の練成会。三回目の合宿に行きます。青年の家には、夏と春二回いきました。大学での初めての経験でした。クラブでの経験でした。去年の一・三年合同コンパで自分の酒の限界を知りました。バカでした。酒をがぶ飲みし途中で記憶が、なくなったのです。次の記憶といえばもう自分の下宿の蒲団の中で寝ていました。誰かに、下宿までつれていってもらったのです。それすら自分の記憶にないのです。大学での初めての経験でした。クラブでの経験でした。大学とは学問の場であり、また人間形成の場であります。今の自分にとって人間形成の場は、主にクラブであろうと思います。

そんな自分が今、もしクラブをやめたら……。

「死」について

経済学部　一年　野　端　富　継

「死」、皆さんは、この言葉を聞いてどんなことを考えまた、想像しますか。「死」それは命がつきること、身体の生活機能が停止すること、こう考える人もいるでしょう。また「死の別れ」と言う言葉なども思い浮ぶ人もいるでしょう。僕はある時期に「死」について考えたことがあるのです。いや、今でも考えます。大学を出て社会で働き、結婚をして、家を建て、そして、老人になり、後、死にいたる。はたして死んでからどうなるのだろうか。こんなことを言うと、老人めいたことだと笑うかもしれませんが、考えれば、考えるほど、死に対する恐怖が大になるのです。では何故「死」が怖いのか。それはきっと、己れがまったくの一人になってしまうからではないでしょうか。まったくの一人、それはどんなに淋しく、味気ないものだろうか。「いや、私はそうは思わない。『死の世界』は、天国と地獄があり天国に行けば楽しく暮らすことができる」と考えてる人もいるかもしれません。しかしこれは、末法思想がはやっていた時代ごろから生まれたもので、人間に都合のいいように考えられたものではないでしょうか。こんな人は多いでしょう。またその方が、気楽でしょう。

また、死によって、この世の苦しみ、悲しみから逃れることができると言った人がいます。その人はシャカと言う人で、人間の苦しみ、悲しみまた戦いはいったいどうして起こるのかということを考えて、苦業に入り、そこであらゆる欲をすてることだと悟りを開いて、それを一般の人々に教え、自分と同じ様に欲を捨てさせようと思ったのですが、俗一般の人々にはわからなかったので、仕方なく死ねば天国に行けると言ったわけです。

いづれにしても「死」とは恐いものです。だから「死を視ること帰するが如し」というように、「死」を覚悟している人は死に臨んで泰然として恐れず、なにがあっても動じません。

日本の武士道文化時代には「武士道とは死ぬことと見つけたり」

といっていました。要するに、武士はいかにして立派に生きるかというものではなくいかにして立派に死すべきかが大切だったのです。

中国でも、司馬遷の「報任安書」にある言葉で「死はあるいは泰山より重く、鴻毛より軽し」というのがあります。この意味は「死は場合によっては、きわめて重要なことでもあるし、とるに足りないことでもある」ということです。そして、後に「それをきめるのは『義』である」と書き加えている。「儀」とは「方式、儀式」である。要するにその死の方式つまり死に方によって決ると書いてあるのです。そうなると、日本の武士道と同じということになるわけです。ではヨーロッパの騎士道はどうか。これは、死ぬために生きるのではなく、生きるために死ぬといった要素が強かったようです。この違いは最近まで続いていました。いや今でも続いているように思われます。

なにはともあれ、「死」あるいは「死の世界」については、はっきりと解明されておりません。おそらくどんなに科学が発達してもこの問題、世界だけは解明できないと思います。また、解明されない方がいいと思います。その理由は、そこが、人間が本当に安らぐただ一つの「いこい」の場所だから……。

空　言

法学部　二年　萩本洋子

二十歳、今私は二十歳になりたてのホカホカでゴザイマス！もう立派な大人、選挙だってできるし、結婚だって自由意思でできるのです、誕生石は、エメラルド、必然的に婚約指輪もエメラルドなのですけれど……。……だが、しかし、いかに生活年令が、二十になろうと、精神年令は、まだ、十代で踏みとどまっている。公衆の面前でいくら大人ぶったって、高校生時には中学生に見られるこの私であります。親はこんな幼い私を見、子供っぽいと言いながらも、急に大人へ変身するより安心するみたい。祖父なんか私が髪をふかく切ると「童らしくなった。」とほめるのですから。外見はさておき、内面の成長を切に望んでいる私です。この事をよく日記に乱筆する。そこには、痛感すること、特に自己嫌悪の多いこと、

例えば、

○月×日

私の名の〝洋〟は「太平洋のように広い心を持つ子に」とつけられたのだが、流石の父上もこれは失点。名に反してコセコセ……このハート、島国根性を代表するようなハートなのです。

○月×日

女の人は直接に人を批判しない。一応は相手をほめ、それからジワジワと攻撃にいく、（ハテドコカデキイタヨウナ？）こんな事を考える時、自分は第三者立場にいる、まちがいなく自分もその類であるはずなのに、人の考え、行為の嫌なところが目につくと、ひそかに又公然と立腹する。ところが自分にも同じところが無きにしも非ずである。「人の振り見て、我振り直せ。」とは、昔の人は、うまい事を言ったものだ。　　のごとくに。

酒と煙草と学生運動と恋と雑多な生活の中に、常に自己の追求をし、最終的に死に至らしめた一女性の日記、そのある部分に私が共感を覚えた日記を引用しょう。

『今日は私の誕生日である。二十歳になった、酒も煙草も公然とのむことができるし、悪いことをすれば「A子さん」でなく「高野悦子二十歳」と書かれる。こんな幼稚なままで「大人」にさせてしまった社会をうらむ。未熟であること、孤独であることの認識はまだまだ浅い。中略、未熟であること。人間は完全なる存在ではないのだ不完全さをいつも背負っている。人間の価値は完全であることにあるのではなく、不完全であり、その不完全さを克服しょうとするところにあるのだ』

二十歳の原点より

私の一日の生活

私の一日の生活それは学校に行くことであり授業を受けて優秀な成績で卒業することであった。それが一年前頃から少しずつ変ってきた。それはクラブの部室に行くことであり部室のいすに坐ってボケーとしてタバコをふかし腹がすいたら学食で焼そばかハムライスを食べに行く。便所に行きたくなったら二階の小さなきたないトイレで用を済まし、また部室に帰ってきて洗ってもいない手で顔と髪をあつかいまわす、先輩や同輩などとバカ話しをし、メンツが足りないと、むりやりに連れて雀荘にかけこみ、負けてしぶしぶ家に帰ってゆく、実にみじめである。二十一才の誕生日も過ぎたのに女の子の手もふれたことのない、話しもできないみじめな生活が通り過ぎて行った。それがこの頃変化を感じる。それはどこからであろうか？そうだあれはどこかの短大の運動会からである。あれから私のおとなしい、まじめな性格が変ってきた。先々週は、どこかの短大にかよい、先週は文化会館に毎日のように通った。受付に坐って、お茶や菓子をたべたり、受付を邪魔したり、でも私も驚いたことがあった。私がいくと、いつもいる人がいる。あの人には負けてしまった。このように私の人生を凶わせたのは何であろう。

もとの生活に戻ろうなどと考えて、今一人部屋でペンを走らせている。さっきまで外でマイクの音が割れた窓から入ってきていた。それとともに涼しい風が私のほほをなでてゆく。のんびり遠く北国で、過ごしてゆきたい。君のひざのそばで、ゆっくり寝たい。などとたわごとのように思い浮かべ私の一日の生活が過ぎてゆく。

規　約

第一章　名称及び目的

第一条　本部は福岡大学学術文化会書道部と称し、本学学生による書道愛好者の団体である。

第二条　本部は部員相互の親睦融和をはかり、人間形成を目指すと共に書道文化の普及、書技の向上を目的とする。

第三条　本部は前条目的を達成するために次の事業を行なう。

一、書道に関まる事業

一、書道に関する調査研究並びに機関誌などの刊行

一、関係書団体との親睦ならびに連絡提携

一、各種展示会出品

一、その他前条目的達成のため必要と認めた事業

第二章　組　織

第四条　本部は講師及び部長各一名を置く。

第五条　本部は幹事、副幹事、会計、企画、庶務、その他必要とする役職を置き、本部を代表する。

第六条　本部は次の機関を置く。

一、役　員　会

一、部　員　総　会

一、OB会、但OB会規約は別に定める。

第三章　役　員　会

第七条　役員会とは、部の円滑なる運営を期するための機関である。

第八条　本会は原則として、第五条に基く役員によって構成される。但、第五条に基く役員以外であっても幹事が認めた場合には、本会に出席することが出来るが議決権はないものとする。

第九条　本会は幹事によって召集され代表される。

第十条　本会は毎月一回以上開くことを原則とする。

第十一条　本会の議決は、部員総会の決定を妨げるものではない。

第四章　部　員　総　会

第十二条　本会は本部の最高議決機関である。

第十三条　本会は本部の部員によりこれを構成する。

第十四条　本会は必要に応じてこれを開き、幹事がこれを召集する。

第十五条　本会の議長は原則として、幹事がこれを兼務する。

第十六条

一、本部会は部員の過半数を以って成立する。

一、本部会の議決は出席者の過半数の賛成を必要とし、可否同数の場合、幹事がこれを決定する。

但、出席者の過半数の賛成で重要事項とし、その決定

には、出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

第十七条　本部会不成立の際、出席者の三分の二以上の賛成を以って仮議決することができる。但、

一、仮議決については事後部員総会に於いて過半数の承認を必要とする。

一、重要事項は仮議決することはできない。

第五章　役　　員

第十八条　役員構成は第五条に同じ。

第十九条　第三条に基き、外部関係諸団体へ役員を派遣することができる。

第二十条　幹事は本部を代表し、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその職務を代行する。

第二十一条　本部の役員改選は選挙制にし、これを重要事項と認め部員の無記名投票による選挙を行なう。

但、委任状は認めるが、委任の方法は年度によって異っても良いものとする。

第二十二条　本部の役員の任期は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

但、役員改選後、翌年三月三十一日までは代行期間とし、その責任は新旧役員の連帯責任とする。

尚、欠員が生じた場合これを補充する。

第二十三条　役員改選は原則として十月に行なう。

第六章　役員の職務

第二十四条　役員の職務は次の通りである。

一、幹事は部務を処理し、部を統括する。

又、部の代表責任者であり、その責任を学術文化会と部全体に負う。

一、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその任務を代行する。又、福岡大学書道部OB会の事務を担当する。

一、会計は部員徴収並びに部費予算に関する収支の記録決算書を作成。

一、企画は第一章第二条に定められた、本部の目的にそって諸活動を企画する。

一、庶務は本部の活動に必要な諸事務を行ない、資料の徴収保管をなし、機関誌の発行を行なう。

但、機関誌の発行は年一回以上とする。

一、第五章第十九条に基く役員は、本部関係諸団体との親睦融和を図り部の向上を目指す。

第七章　会　　計

第二十五条　本部の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日まで

とする。

第二十六条　本部の部費及びその他の所定納入金については、前年度末に部会に於いて決定しなければならない。

第二十七条　会計報告は会計が行なう。又、部員の要求に応じて会計簿を公開し、年一回決算報告書を作成し、これを報告する。

第八章　部員の権利義務

第二十八条　本部の部員は次の権利を有する。

一、本部のあらゆる活動に参加し、人間形成の場として利用すること。

一、本部の部員総会に出席し、その議決に参加すること。

一、本部に於ける選挙権、被選挙権を有する。

一、本部の備品及び図書を利用すること。

第二十九条　本部の部員は次の義務を負う。

一、部員は部員総会に出席すること。

但、やむなく欠席する者は事前に欠席届を幹事に提出しなければならない。

一、部員は部費その他の所定納入金を定期に納入すること。

一、本部の規約に従うこと。

第九章　入部・退部

第三十条　本部の入部は年度始め募集することを原則とし、学文会登録及び入部金納入を以って部員とする。

第三十一条　本部の退部は書面を以って幹事に願い出て、役員会の承認を得、部員に通達する。

但、退部を希望する者は、その在籍期間までの所定の納入金を完納する。

第十章　罰　則

第三十二条　書道研究する熱意なく本部の名誉を汚したる者、部活動を理由なくして一ヶ月以上怠った者。又、部の秩序を乱す者は部より除名する。

但、欠席届提出者についてはこの限りではない。

第十一章　規約改正

第三十三条　本部規約改正の発議は部員総会に於いて部員の四分の一の同意により総会の議決を経て行なわれる。

尚、改正においては、本部員の三分の二以上の出席を必要とし、その出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

附　則

附　一　本規約は、昭和三十五年十一月一日より実施、昭和四十五年四月一日改正。

〈編集後記〉

＊ 機関誌発行にあたり、御協力戴いた方へ心から感謝致します。

＊ 荒鶯発行が例年より遅れたことをおわびいたします。

荒鶯　第十五号

福岡大学学術文化部会　書道部機関誌

昭和四十九年八月四日発行

編集責任　宮崎秀博

佐野正実

印刷所　福岡市中央区大名一丁目七番二号

福岡タイプ

TEL（七七一）一六〇四